# はじめに―資質・能力を育てる授業・評価開発へ―

愛知教育大学教職大学院　佐藤　洋一

## 1、解の無い、予測できない時代を「たくましく生き抜くために」

戦後約七〇年が経過、改正教育基本法・学校教育法のもと、解のない時代を生き抜く資質・能力や非認知的能力、学習科学等の観点から次世代型の教育が求められてきました。二〇〇〇年以降、特に人間的な洞察力や行動、態度を支える非認知的能力（スキル）としての困難を乗り越える回復力（リジリエンス）、自制心ややり抜く力、論理性と創造性、学びに向かう人間性（生き方や価値観・感性）等がより重視されてきました。

これまでの教育の良さや伝統を踏まえ、複雑多様な価値観、フェイクニュース、「悪意ある批評」等にも挫けず、児童生徒達が真に健康で幸福になるための教育、たくましく生き抜くための教育の在り方が問われています。

## 2、新学習指導要領「告示」と資質・能力育成…。何が、なぜ、どう変わるのか?。

新学習指導要領「告示」（文科省、二〇一七年三月末）は資質・能力育成をめぐる重要な教育施策ですが、これ等の背景に、同時進行的に次のようなことがあることに留意する必要があります。1、第三期教育振興基本計画や第四次産業革命等（シンギュラリテイ二〇四五年問題他）、2、二〇三〇年代の資質・能力と教育の枠組みを模索する「ＯＥＣＤ二〇三〇」（文科省とＯＥＣＤ、東京学芸大学・東京大学）、3、「次世代教員研修センター」の設置、大学・教育委員会の連携協力による養成・採用・研修の大きな枠組み、在り方の再構築等です。

## 3、〝深く人間的な学び〟を創るこれからの授業と評価―求められる資質・能力と伝記教材の活用―

二〇一六年度公開研究会「新しい学びを創る」は、二〇一七（平成二九）年一月九日（月・祝）開催、一七〇

名以上の参加申込、立ち見等の御迷惑をおかけ致しましたが盛況の中で終えることができました。御参加の先生方に敬意を表するとともに、御登壇の先生方、授業提案をお引き受け下さった石元恵未・藤井康次両先生にも心から感謝申し上げます。副会長の兵藤伸彦・鈴木悟志先生、理事の岡田豊・森和久先生等愛知県を代表する先生方、事務局の皆様の御協力の御蔭です。このささやかな研究会も三年目を向かえることができそうです。

二回大会テーマは「〝深く人間的な学び〟を創るこれからの授業と評価―求められる資質・能力と伝記教材の活用―」。新学習指導要領「告示」後に、実践上の課題になると思われる「深い学び」「人間性に向かう学び」をキーワードに据えて研究会を構成しました。伝記教材を例に国語科教材研究や授業研究、系統性や評価にも目を向け、国語科という教科、伝記教材というテクスト形式での学びと評価を踏まえ、かつ教科の論理や専門性を超えた「汎用的資質・能力（認知的・社会的スキル）」「学習過程論と習得・活用・探究（振り返り）」「メタ認知、学びの一般化・人間性育成」の視点等も協議したいと考えました。

前半の、石元・藤井両氏の模擬授業は新学習指導要領を先取りした形での実践的御提案でした。後半の役員による討論・大会テーマの解明では、手前味噌ですが多角的・多面的に現代的な教育課題を深めることができたと思います。司会の伊藤清英・左近妙子両氏は議論を大変効果的に深められました（第六部の「概要」五頁、「報告」二〇頁を御参照）。「新たな学びと評価を創る」問題提起の一端ができたのではないかと考えております。

最後になり恐縮ですが、この研究紀要・第二号を刊行することができるのは趣旨に賛同し原稿を御寄稿いただいた先生方の熱い思いによるものです。特に、編集業務等の面倒なことをやって下さった事務局の諸先生方、余島様（余島編集事務所代表）の御蔭です。事務局長の吉川和良先生、副事務局長の室賀美紀・加藤洋佑・有田弘樹・鈴木大文各先生、そして余島満彦様には深く…御礼を申し上げます。

皆様がいて下さらなかったら、この紀要はこうして世に出ることは無かったと思います。